

Title	<論文>内村鑑三のスコットランド観 --日本概念の構造的な分析--
Author(s)	渡部, 和隆
Citation	アジア・キリスト教・多元性 (2021), 19(2): 23-45
Issue Date	2021-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/264509">https://doi.org/10.14989/264509</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 内村鑑三のスコットランド観

## —— 日本概念の構造的な分析 ——

渡部 和隆

### 序. 本論の目的

「山陽といふ人は勤王論を作った人であります。先生はドウしても日本を復活するには日本をして一団体にしなければならぬ。一団体にするには日本の皇室を尊で夫で徳川の封建政治をやめて仕舞つて、夫で今日謂ふ所の王朝の時代にしなければならぬといふ大思想を持って居つた。併ながら山陽は其を実行しやうかと思つたけれ共、実行しない。山陽程の先見の無い人は夫を実行しやうと思つて戦場の露に消た。山陽はコスかつた。逆も今日は出来ないと思つたから、自分の志を日本外史に述べた。(中略)今日の王政復古を持来したものは何であるかならば、外の多くの人が云ふ通り、山陽の日本外史が日本を拵へたのであります。山陽は其思想を遺して日本を復活させた。」<sup>1</sup>

上記の引用は、幕末の尊王攘夷運動に多大な影響を与えた頼山陽（一七八一年～一八三二年）とその著書『日本外史』（一八二七年）について、内村が述べたテキストである。注目すべき点は「日本をして一団体にしなければならぬ」という表現である。ここから読み取れるのは、内村が、江戸時代の幕藩体制を日本がバラバラに分裂した状態と見なしていたことであり、さらに、幕末にそれらを統一しようとする頼山陽のような思想や勢力が現れ、実際に明治維新で新しく「日本を拵へ」て「復活さ」せることになったと考えていたことである。内村にとって、近代日本は均質なネーションではなく、むしろその統一のうちに多を孕むものであった。内村の日本概念は、単一で均質な国が古代から続いてきたという静的なものではなく、むしろその内部に分裂と統一という複雑な構造を含む動的なものだったのである。本論は内村の日本概念がもつ分裂の契機と統一の契機とについて分析するものである。内村と日本といえば、2つのJや武士道に接木されたキリスト教が有名だが、そうしたテーマを扱う場合、先行研究では日本が最初から統一された実体をもつ自明な前提として扱われている場合が多く、その内部に含まれる複数性や分裂の契機が十分に考察されているとはいいが

<sup>1</sup>『後世への最大遺物』、内村鑑三全集四巻、岩波書店、二六九頁。なお、これ以降、内村鑑三全集からの引用は全て「全集」と表記する。

たい<sup>2</sup>。本論は内村の日本概念について、統一の契機と分裂の契機との双方を扱うことを目指すものである<sup>3</sup>。その際、本論では内村のスコットランド観を手掛かりにする。なぜなら、スコットランドは内村がしばしば理想的な国として言及する国の一つであり、イギリスという礫岩のような連邦国家<sup>4</sup>のなかにあつて独特な地位を占める国だからである。内村自身、スコットランド人とイングランド人とが同じ連邦国家に属していながらも、全く異なる民族であることを知っていた<sup>5</sup>。スコットランドが近代の国民国家という統一における内なる多様性を示す国であることを内村は認識していたのである。したがって、スコットランドは内村のネーション概念における分裂の契機と統一の契機について考察するにはまさに適切な素材であると言えよう。本論ではまず、第一節にて内村のスコットランド観の内実を分析し、第二節にて内村がそれをどのように日本の現実に適用していたかを考察する。最後に、第三節では内村の日本概念が孕んでいる意義と問題点とについて、内村と朝鮮との関係を通して論じる。

## 1. スコットランド理解の内実

スコットランドが内村のなかで思想的な意味合いを帯びるようになるのは一八九六年が最初である。この時期は不敬事件の後であり、内村は日本各地を転々としながら『基督信徒の慰』、『求安録』、『日本及び日本人』（のちの『代表的日本人』）、『余は如何にして基督信徒となりし乎』といった著作を発表していた。日清戦争で義戦論の失敗を経験するのもこの時期である。内村が著述家として歩み始めた時期であり、ジャーナリストとして日本社

<sup>2</sup> 最近の研究では今高義也『内村鑑三の世界像 伝統・信仰・詩歌』（ペリかん社、二〇二〇年）が挙げられる。これは内村と詩歌との関わりを通して「内村における『ナショナリズム』の源流にある〈伝統思想〉ないし〈伝統的世界像〉の『具体的分析』（一一頁）を行ったものであり、詳述すると、水戸学の詩歌、報徳記、古今和歌集などの日本の伝統的な文学を内村がどのように読み替えて解釈しているかの分析を通して、内村の世界像に迫ったものである。本論との関連で重要なのは、今高の研究によって、内村が幼いときから水戸学の詩歌に馴染んでいたこと、さらに内村が贖罪信仰や不敬事件での経験を通して水戸学の「正気」概念を読み替えて自身の思想を形成していったことが明らかにされたことである。これは、論者の考えに引き付けるならば、内村の日本概念のうちの統一の契機を扱ったものである。今高の研究は内村のテキストや生涯に即して詳細かつ丁寧に分析した結果であり、内村の2つのJの問題を考える上で非常に教えられることの多い優れた研究である。しかし、複数性や分裂の契機に関しては、分析や考察はなされていない。

<sup>3</sup> 論者は内村の日本概念がもつ複数性について、すでに拙論「内村鑑三における「東北」の概念——地方の観点からの「日本」概念の分析——」『アジア・キリスト教・多元性』第一七号、二〇一九年、九七～一三二頁においてある程度の分析を行った。本論はそのときに残された課題を扱うものである。

<sup>4</sup> イギリスの政体を礫岩のイメージでとらえる議論に関しては近藤和彦『イギリス史10講』、岩波新書、二〇一三年を参照した。

<sup>5</sup> 例えば、『地理学考』に次のような記述がある。「チビオツト山（Cheviot Hills）は英吉利と蘇格蘭との間に横はる小山脈にしてその最高点は海面より三千尺に達せず、然るにその阜丘の一連は永く両国をして一躰たらざらしめし大障害物なりき、而して合同の今日に至るも二国人心の傾く処の相異なるは観察者の皆な承認する処なり」（全集二巻、三七三～三七四頁）。

会の現状に着目し始めた時期であると言えよう。そんな一八九六年四月一〇日、内村はアメリカの友人ベルに宛てた書簡のなかでスコットランドについて以下のように書いている。

「私はあいかわらずカーライルの勤勉な研究者です。彼を通じて、私はスコットランド人とスコットランドにとっても夢中になっています。極端なまでに正直 (honest) で、気取らず (simple)、誠実 (sincere) といったスコットランド人の剛健 (sturdy) な性格は私の日本人の理想と一致しています。(中略) 私は *The Congregationalist* 誌に掲載された、CairnsとPatonとカーライルの“三人のスコットランド人の家庭 (home)” についての記事にもとても興味をかきたてられています。その記事は私に私自身の父の家庭と鍛錬とを思い起させます。もちろん、彼らの家庭に行き渡っていた長老制主義 (Presbyterianism) はありませんでしたが。私は今、Froudeの『カーライルの人生』 (Life of Carlyle) を読んでいます。(中略) その本の中であなたは、この世がその才能のためにどんなものを提供しようとも自分の魂を売り渡すことのない正真正銘のピューリタンの信仰の息子を、まったくのスコットランド人を見出すでしょう。カーライルが正統派のクリスチャンでなかったとしても、彼は今世紀がもったなかで最も偉大な義の説教師であり、この物質主義的な世紀がこれまでに生み出すことのできたなかで、ほとんどエゼキヤもしくはエゼキエルの域に達しています。」<sup>6</sup>

内村がトーマス・カーライルを通してスコットランドやスコットランド人に対し、好意的なイメージを最初に構築していることが分かる。イングランドと合併した後の近代のスコットランドが内村におけるスコットランドのイメージの基本であった。重要なのは内村が、スコットランドの歴史や、キルトやタータンといったスコットランド独自の民族文化には全く言及せず、むしろ「極端なまでに正直 (honest) で、気取らず (simple)、誠実 (sincere) といったスコットランド人の剛健 (sturdy) な性格」すなわちスコットランド人がもつ道徳性を高く評価していることである。こうした道徳性は、特殊な一民族の性格であると同時に、他の民族においても発見可能もしくは獲得可能な普遍性を有している。興味深いことに、内村はスコットランド人のナショナリズムや独立心を鼓舞するような独自の歴史や文化によってスコットランドを評価するようなことはしていない。むしろ、他の民族に対しても開かれた普遍的な道徳性を規準にスコットランドを高く評価しているのである。かくして、内村のスコットランド概念は、カーライルという実例をもとに帰納的に構築された概念であると

<sup>6</sup> 全集三六巻、四三九～四四〇頁。引用中に出てくる *The Congregationalist* に関しては、一八九〇年九月二六日のベル宛書簡にて *Congregationalist* (Boston) という雑誌を購読していると書かれているのが確認できる (全集三六巻、三二四頁)。Froudeに関しては、James Anthony Froude という人物が書いた伝記が北海道大学図書館の内村鑑三文庫に所蔵されている。“The catalogue of Uchimura Library” 一九五五年、北海道大学図書館、七五頁を参照。なお、CairnsとPatonとについては、現時点で詳細は不明である。今後の課題としたい。

同時に、他の民族も目指すべき理想として規範性を帯びた概念ともなっている。実際、内村はこの時点で既にスコットランド人の道徳的な民族性を日本人の理想の民族性、特に自らの出自である武士のエートスの理想に引き付けて理解しており、さらにピューリタンや旧約聖書の預言者の信仰の観点から高く評価している。内村にとって、スコットランドは最初から道徳的にも文化的にも宗教的にも優れた理想の国だったのであり、武士のような日本の伝統に近いと同時に、近代国家として出発したばかりの明治の日本が目指すべき理想でもあった。以上のような内村のスコットランド観が現実のスコットランドと照らし合わせたときに妥当なものと言えるかどうかについては、論者の力量を超えるため、ここでは扱わない<sup>7</sup>。本論では、上記のスコットランド観から内村がどのような思索を紡いだかに焦点を当てて論じていく。

この理想の国スコットランドが内村の公的な文書に思想的な意味をもって登場するのは一八九七年の“A GREAT NATION”<sup>8</sup>が最初である。このテキストにて内村は、国の偉大さは領土の大きさによるのではなく、人類の文化や歴史に貢献する人材を輩出することによるのだと主張し、領土は小さくても人類に大きな貢献をなした国の一例としてスコットランドを挙げている。

「小さなスコットランド、大きさという点ではわれわれの北海道ぐらいのスコットランドの偉大さを誰が測りうるだろうか。スコットランドはヒューム、アダム・スミス、デュガルド・スチュアート、リヴィングストン、ロバートソン、バーンズ、カーライル、そしてその他ほとんど無数の精神的・霊的な最高貴族（*mental and spiritual grandees*）を生み出したのだ。小さくして偉大になれるということは、人間にとって栄光であるのと同様にネーション（*nation*）にとっても栄光である。」<sup>9</sup>

内村は反語を駆使しつつ、スコットランド啓蒙の思想家、スコットランドの探検家、スコットランドの文学者を何人か列挙し、スコットランドのように、国土は小さくても優れた人材を輩出する国こそが“A GREAT NATION”であると主張する。ここで内村は国の偉大さという概念の内実を、国力や国土の大きさから別のものへと組み換えている。重要なのはこのテキストにおいて、内村が、概念の組み換えを前提にしつつ、スコットランドのような国の存在を根拠にして、明治政府の富国強兵政策、特に海外への膨張政策と軍備拡張政策とに対

<sup>7</sup> もっとも、当時の内村は、スコットランドを理想化する一方で、現実のスコットランドに社会的な問題があることも認識していた。例えば、同年八月一九日に万朝報にて発表された“MISCELLANIES”という英文のテキストにて、内村はスコットランドとアイルランドにおける土地寡占の問題に言及している。全集五巻、二三頁を参照。

<sup>8</sup> これは一八九七年一二月二日に万朝報に英文で掲載されたテキストである。全集五巻、一九七～一九八頁。

<sup>9</sup> 全集五巻、一九八頁。

する批判を展開していることである。

「日本は『中国の<sup>しひやくよしゅう</sup>四百余州』を吸収することなしに偉大な国になることができる。野蛮人 (savages) と偽善者は偉大さを大きさに、すなわち『軍備拡張』に求めるが、聖人と哲学者は、全ての常識 (common sense) ある人たちと同じく、どこに偉大さが存するかを知り、自分たちの探求をそこに向けるのである。」<sup>10</sup>

内村の政治思想が、農業を中心とする平和的小国主義であり、その観点から明治政府の軍事的な大国主義を批判したことは先行研究においてしばしば指摘されている<sup>11</sup>。ここではスコットランドが内村の農業を中心とする平和的小国主義の論拠の一つになっていることが確認できる。ただし、この時点ではまだスコットランドがイギリスという礫岩のような連邦国家のなかで占めている独特な地位に関する言及はない。

内村がイギリスという礫岩のような連邦国家におけるスコットランドの地位に言及するのはそれからだいぶ経った一九一三年に発表された「カルビンの肖像に題す」<sup>12</sup>という短文が最初である。この時期は再臨運動の直前期であり、内村が聖書の研究に没頭しつつ、娘ルツの死などを受けて再臨信仰の信仰的意義を実感しつつあった時期である。内村はカルヴァンについて次のように言う。

「此人ありしが故に地球の表面は一変せり、此人ありしが故に弱き和蘭は起りて強き西班牙を挫き、平民政治の模範を世界に提供せり、此人ありしが故に征服せられし蘇格蘭は信仰を以て其征服者なる英吉蘭を征服せり、此人ありしが故に英国に清党起り、西半球に平民国の連続を見るに至れり、此人ありしが故に聖書は世界的大勢力となれり、此人ありしが故に美術は平民を画くに至り、政治は平民に由て平民のために施さるるに至れり、偉大なる哉カルビン、余は彼の偉貌に対して畏敬、欽仰の念を禁ずる能はず。」<sup>13</sup>

注目すべき点は「征服せられし蘇格蘭は信仰を以て其征服者なる英吉蘭を征服せり」という記述である。内村は、外面上はイングランドの侵略を受けて征服されたスコットランドだが、カルヴィニズムの信仰によりむしろイングランドを征服することになったと主張している。興味深いことに、内村はイギリスという礫岩のような連邦国家におけるイングランドと

<sup>10</sup> 全集五巻、一九八頁。

<sup>11</sup> 先行研究について古いものから言えば、高橋正幸「小国主義と内村鑑三」内村鑑三研究三巻、キリスト教図書出版社、一九七四年、五七～七八頁が挙げられる。最近のものでは、三浦永光『現代に生きる内村鑑三 人間と自然の適正な関係を求めて』御茶の水書房、二〇一一年が挙げられる。

<sup>12</sup> これは一九一三年一月一五日の『聖書之研究』一五〇号に掲載された短文のテキストであり、同号に掲載された口絵「ジョン カルビンの肖像」に寄せたものである。全集一九巻、三二五頁。

<sup>13</sup> 全集一九巻、三二五頁。

スコットランドの支配関係を転倒させて把握している。もともと、転倒された支配関係の内実をここから読み取るのは困難である。それが読み取れるのは一九一七年に発表された「宗教改革を迎へし国と之を斥けし国」<sup>14</sup>というテキストである。宗教改革四〇〇周年を記念して書かれたこのテキストにおいて、内村はプロテスタントが優勢な国とカトリックが優勢な国との比較論を展開し、プロテスタントが優勢な国の方が近代文明を受容して発展することができたと結論づけ、最後に日本にもプロテスタントが必要だと主張している。そこでは、スコットランドはジョン・ノックスによってカルヴィニズムを受容した国として登場し、イングランドやアイルランドと比較される形で論じられている。いずれも、イギリスという礫岩のような連邦国家の磁場の圏内にあってお互いに分裂と統一の歴史を形成してきた国々であり、二〇二一年現在も歴史に由来する複雑な問題を抱えている国々である。では、一九一七年の時点で内村はこれら三国の関係をどのように論じているのだろうか。

まず、スコットランドとイングランドとの関係について、内村はスコットランドが政治的にはイングランドに敗北して支配されるようになったことに言及し、続いて以下のように述べている。

「然るに此国にジョン・ノックス出てゼネバ湖畔に大カルビンより直に改革の精神を受け、故国に帰りて之を其民に伝へしより、茲<sup>こゝ</sup>に真理の烽火は上り、自由は起り、思想は湧き、靈に於ても肉に於ても五百万の蘇格蘭人は三千万の英<sup>イングランド</sup>蘭人を押し、又後者を通うして全世界を圧するに至つた、謂ふ其の人口の比例を以てして蘇格蘭ほど世界的大人物を産せし国なしと、ワルター・スコットは小説界の王である、デビッド・ヒュームは近世哲学の開祖である、リビングストンはアフリカ大陸の開発者である、スチーブソンは蒸気機関の発明者である、トマス・カーライルは新教主義の上に築ける新理想主義の唱道者である、其他世界的に偉大なる蘇格蘭人の名を挙げんには日も亦足りないのである。」<sup>15</sup>

内村はスコットランド人が、制度上はイングランドに支配されつつも、イングランドの思想界と実業界との双方に優れた人材を送り出すことによって逆に「靈に於ても肉に於ても」イングランド人を圧倒したと述べている。スコットランドは優れた人材を輩出することによって、政治上の外見とは逆に、イングランドを霊肉両面にて内側から実質的に支配したと内村は見なしていた。いわば支配関係が内側から転倒されたと主張しているのである。そして、支配関係の内側からの転倒に成功したのは、ジョン・ノックスの宗教改革によってカルヴィ

<sup>14</sup> これは一九一七年一〇月の『聖書之研究』二〇七号に掲載されたテキストである。このときは宗教改革の四〇〇周年にあたり、内村はこの号の『聖書之研究』を「ルーテル記念号」と銘記し、ルターや宗教改革を扱った論文や記事を大量に載せている。

<sup>15</sup> 全集二三巻、三七六～七頁。

ニズムを受容したことにより中世時代の迷信と無知が取り去られ、「真理」「自由」「思想」がスコットランドに興ったからだとされている。「真理」「自由」「思想」の力によってスコットランドは支配関係の内側からの転倒に成功したのである。さらに注目すべき点は、スコットランドがさらにイングランドを通して「全世界を圧するに至った」<sup>16</sup>と内村が述べている点である。ここから読み取れるのは、イングランドを内側から支配したスコットランドはイングランドが生み出した大英帝国や英語圏の独立国の内側にも入り込み、大英帝国および英語圏の独立国を道具的に利用する形で「全世界」を圧倒するに至ったと内村が見なしていたことである。支配関係の内側からの転倒はイングランドから大英帝国、さらに「全世界」にまで及ぶとされている。このような内村の分析がイギリス史の観点からみて妥当かどうかは論者の力量を超えるため、ここでは扱わない。代わりに本論では、スコットランドが支配関係の内側からの転倒に成功した理由を内村がカルヴィニズムの受容に求めていることに着目したい。というのは、カルヴィニズムの受容という点において、スコットランドはアイルランドと比較されているからである。

内村はスコットランド人とアイルランド人とがともにケルト系であることに触れつつ、イギリスという礫岩のような連邦国家の内部における地位には大きな違いがあることを指摘し、両者の比較論を開陳する。

「蘇格蘭が精神的に英国を支配し、<sup>アイルランド</sup>愛蘭が其反対に英国の支配を受くる理由は何に在る乎、二者同人種であつて同語の民である、而かも一は主であつて他は従である、而して主なる者は改革を迎へて元始の福音に接したのである、従なる者は之を斥けて旧き教会に属したのである、明暗の分るゝ所、榮辱の岐るゝ点、歴史の板面に大書せられるゝ此事實は、走卒と雖も之を読んで誤らないのである。」<sup>17</sup>

内村は、アイルランドは支配関係の内側からの転倒に失敗したと見ており、その原因はカトリックにとどまったことであると分析している。イギリスという礫岩のような連邦国家において、外見上はイングランドがスコットランドとアイルランドとを支配しているが、実質的にはスコットランドが支配関係の内側からの転倒に成功して「精神的に」イングランドを支配しており、逆にアイルランドはイングランドの支配に屈している。この差異の原因を内村は、カルヴィニズムという「元始の福音」を受け入れるか、それともカトリックという

<sup>16</sup> 内村が「全世界」という言葉で何を想定しているかは判然としませんが、おそらく、今で言う英語圏の国々のことだろうと推定される。というのは、一九二二年の『キリスト伝研究（ガリラヤの道）』において内村は「ジョン・ノックスは茲にカルビンより純福音を授かり、彼は之を齎して故国スコットランドに帰り、其民の間に之を播きたれば、美種は沃壤に播かれて六十倍百倍の果を結び、今や英国、米国、濠洲、其他英民族の到る所に、カルビン主義の隆盛を見るに至った。」（全集二七巻、三〇二頁）と述べているからである。

<sup>17</sup> 全集二三巻、三七七頁。



「旧き教会」にとどまるか、にみている。カルヴィニズムを受容したスコットランドは支配関係の内側からの転倒に成功したが、カトリックに留まったアイルランドはイングランドに支配されている。内村にとって、カルヴィニズムという「元始の福音」の受容は支配関係の内側からの転倒に成功するための必要な条件であり、国の繁栄のための礎なのである。かくして、内村は当時の日本に対して「蘇格蘭たらんと欲するか」<sup>18</sup>と問いかけつつ、「今やルーテル、カルビンの唱へし福音は汝に提供されつゝあり、而して汝の選択如何に由て汝の永遠の運命は定まらんとす、此世界的大記念日に際して我は復又熱誠を罩めて汝の為に祈らざるを得ず」<sup>19</sup>と述べ、このテキストを締めくくっている。

以上が内村のスコットランド観である。内村にとってスコットランドは、富国強兵と海外への膨張政策に励む当時の日本とは真逆の、道徳的にも文化的にも宗教的にも優れた理想の国であり、明治の近代日本が目指すべき理想でもあった。また、イギリスという礫岩のような国家においてカルヴィニズムの受容による支配関係の内側からの転倒に成功した国であった。このような高い評価は晩年まで変わることはなかった。例えば、内村は一九二八年四月一六日の日記にて「蘇格蘭土の二大学者ロバトソン・スミスとG・A・スミス（二大スミス）の預言者研究」<sup>20</sup>を読んでいることに触れつつ、次のように書いている。

「何んと云ふても蘇格蘭土は偉らい。多分世界最大の国であるだらう。縦し其研究は独逸程深くないとして、其精神は遙かに深く、其信仰は遙に高くある。学ぶべきは確かに此国と民とである。両大スミスに由り二千六百年前の預言者が今物言ふ者となつた。斯んな生きた註解者が他に何処にゐるであらう乎。福ひなる哉、ジョン・ノツクスを産じた蘇格蘭土よ。汝に由て全人類は最後まで教へられ、又導かるゝであらう。」<sup>21</sup>

内村は最後までスコットランドを高く評価していたのである。

## 2. 内村の東北＝スコットランド論

本節では、上述したスコットランド概念が日本の現実に対してどのように適用されているかを分析する。前節でも日本への適用が散見されたが、本節では改めて、内村のスコットランド概念がもつ「支配関係の内側からの転倒」に着目し、これが日本国内の社会的現実に対

<sup>18</sup> 全集二三巻、三七八頁。

<sup>19</sup> 全集二三巻、三七八頁。

<sup>20</sup> 全集三五巻、三〇八頁。なお、引用中の「二大スミス」とその著作は具体的には、W. Robertson Smith “The prophets of Israel and their place in history, to the close of the 8th century B.C.” Lond, A.&C. Black. 1919と、George Adam Smith “The Book of the twelve prophets” Vol. 1,2 7th ed., 3rd ed. Lond. Hodder&Stoughton. 1899-1890(The expositor’s Bible)である。“The catalogue of Uchimura Library” 一九五五年、北海道大学図書館、二六頁を参照。

<sup>21</sup> 全集三五巻、三〇八頁。

してどのように適用されているかについて分析を行う。

内村の日本概念がネーションとしての統一にもかかわらず内なる多様性を帯びていることは既に序で指摘した通りだが、改めて近代日本という国民国家に対する内村の思想の内実を検討する上で注目すべきことは、内村が晩年まで日本政府を藩閥政府と呼んでいることである。例えば、内村は一九二三年に発表した「残る者と残らざる者」<sup>22</sup>というテキストで次のように書いている。

「私は少年時代に徳川幕府の倒れるを見ました。青年時代に薩長藩閥政府の全盛を見、  
壮年時代に之と闘ひ、老境に入ると同時に其衰退を目撃するの喜びを持ちました。」<sup>23</sup>

内村は大正時代の「老境」になって「薩長藩閥政府」が衰退したと認識していた。逆に言えば、内村にとって、大正デモクラシーによって本格的な政党政治が始まるまで日本政府は「薩長藩閥政府」であった。すなわち、近代国家としての外見はどうであれ、薩摩や長州といった一部の地域が他の地域を一方向的に支配する形で統一されているのが大正時代までの近代日本の実態だと内村は見なしていたのである<sup>24</sup>。ここで注意すべきことは、内村の薩長と明治維新の評価がかなり低いことである。内村と「薩長藩閥政府」との「闘ひ」が激しかったのはジャーナリスト時代であるが、そのときに書かれた「胆汁数滴」<sup>25</sup>という短文のテキスト群が内村の薩長の評価と明治維新の評価を端的に表している。では、「胆汁数滴」が書かれた一八九七年の時点で内村は明治維新と「薩長藩閥政府」とについて、どのような評価を下しているのだろうか。

「薩長政府は如何なる精神と法方とを以て徳川政府を乗取りし乎、是れ今日大いに攻究すべき問題なり、勤王は誠に彼等の精神なりし乎、公議正論は実に彼等の法方なりし乎、

<sup>22</sup> これは一九二三年六月一〇日『聖書之研究』二七五号に掲載されたテキストであり、「一九二三年五月十日宇都宮に於て」という副題が付けられている。

<sup>23</sup> 全集二七巻、五〇八頁。

<sup>24</sup> 原敬内閣の成立直後の一九一八年九月三〇日の日記において、内村は次のように書いている。「昨日寺内内閣倒れて原内閣がなつた、藩閥政府が死んで政党内閣が生れたと云ひて喜ぶ者がある。或ひは多少の進歩であるかも知れない、然し乍ら別に喜ぶ程の事ではない、如何なる内閣が成るとも世は依然として罪の世である、暗黒の世である、野心欲望威を逞しうし競争暗闘絶ゆる間もなしである、たゞ律法と証詞とを求むべしである、真正の政治はキリストの再臨を待て始めて来るのである。」(全集三三巻、一五～一六頁。)再臨信仰という宗教的次元からの現世の相対化が見られるテキストであるが、他方、内村が大正デモクラシーによる本格的な政党政治の開始を「多少の進歩」と評価しつつも、その動向を注視していたことも伺えるテキストである。その五年後、本文でも引用した通り、内村は藩閥政府について「老境に入ると同時に其衰退を目撃するの喜びを持ちました」と述べているのである。内村が原敬内閣成立以後、大正デモクラシーによる本格的な政党政治の展開を肯定的に把握していたことが伺える。

<sup>25</sup> これは一八九七年四月に六回に分けて万朝報の社説欄に掲載されたものであり、通し番号と小見出しがついた合計三〇の短文から構成されるテキストである。

彼等の乗取り手段に未だ歴史の認めざる隠謀譎計なかりし乎。」<sup>26</sup>

「勤王を名とし、錦旗を翻へし、終に日本国の実権を握るに至りし彼等今日の行為は如何、維新改革なる者の道義的改革に非ずして利己的掠奪の一種たりしことは其今日に顕れたる結果に依て明瞭なるに非ずや」<sup>27</sup>

「余輩は思ふ新日本は薩長政府の賜物なりといふは虚偽の最も大なる者なりと、開国、新文明、封土奉還は一として薩長人士の創意に非ず、否な、彼等は攘夷鎖港を主張せし者なり、而して自己の便宜と利益とのために主義を変へし者なり、即ち彼等は始めよりの変節者なり」<sup>28</sup>

内村にとって、明治の藩閥政府は利己的な「変節者」であり、明治維新は薩摩藩と長州藩による「乗取り」「利己的掠奪の一種」であって、双方ともに日本の近代化に対して何の貢献もはたしていないのである。実に興味深いことに、明治維新によって日本の近代化が始まったという現代の一般的な歴史観とは真逆の歴史観を内村は提示している。では、利己的な「変節者」である「薩長藩閥政府」の支配の結果、日本はどうなってしまったのか。

「日本今日の腐敗を以て日本国民の罪に帰するは非なり、上の為す所下之に倣ふは我国風なりとす、下の腐敗は常に上の腐敗を示す、隠れたる薩長政府の腐敗は顕れたる日本今日の腐敗に依て明瞭なり」<sup>29</sup>

「事実の最も明瞭なるは、或は最も明瞭に為し得べきは足尾銅山事件なり、是れ科学者の判断を待て決定し得べきものなり、然るに此明瞭なる事件に対して数年の長き未だ一截断を下す能はず、是を無能政府と称せずして何ぞ」<sup>30</sup>

「腐敗せる今日の社界は薩長政府の反射映なり、其淫風は薩長政府の吹入せし者なり、其偽善的宗教と教育とは薩長政府の本質を映ぜし者なり、其『実業』なる者は薩長政府の邪慾を暴露する者なり、薩長主義を實行せし者が腐敗せる日本今日の社界なり、薩長政府を影大せし者が千島から台湾にまで互る日本今日の醜態なり。」<sup>31</sup>

「此腐敗政府に導かれて、此腐敗華族を国民の亀鑑と仰て、此代価付きの道德に薰育せられて、日本国民の結極は如何、日本は国民としては救ふべからざるの位置に立至らんとしつゝありとは真に日本を愛する人が屢々発せし愁声なり（中略）若し薩長政府を永續せん乎、是れ日本の最終政府たらむやも未だ以て量るべからず、胆汁未だ吐き尽さざ

<sup>26</sup> 全集四卷、一二二頁。通し番号は二、小見出しは「大に維新歴史を攻究せよ」

<sup>27</sup> 全集四卷、一二三頁。通し番号は四、小見出しは「起てよ佐幕の士」

<sup>28</sup> 全集四卷、一二七～一二八頁。通し番号は十六、小見出しは「大虚偽」

<sup>29</sup> 全集四卷、一二五頁。通し番号は十一、小見出しは「腐敗の泉源」

<sup>30</sup> 全集四卷、一二六頁。通し番号は十三、小見出しは「無能政府」

<sup>31</sup> 全集四卷、一二九頁。通し番号は十九、小見出しは「今日の社界と薩長政府と」

るに余輩の眼中に血涙の浮び来るを覚ゆ」<sup>32</sup>

「遠慮なく利慾を嗜みし者は薩人と長人なり、利慾を学理的に伝播せし者は福沢翁なり、日本人は福沢翁の学理的批准<sup>サンクション</sup>を得て良心の譴責なしに利慾に沈淪するに至れり、薩長政府の害毒は一革命を以て洗滌し去るを得ん、福沢翁の流布せし害毒に至ては精神的大革命を施すに非ずんば日本人の心底より排除し能ざらむ。」<sup>33</sup>

内村にとって「薩長藩閥政府」は腐敗した「無能政府」であり、「淫風」「偽善」「邪慾」でもって「利慾を嗜む」むものであった。そうした「薩長藩閥政府」の「薩長主義」が全国に広まったことで日本全体が社会的にも精神的にも腐敗しつつあるというのが内村の社会分析であった。「薩長藩閥政府」は日本の近代化を導いたリーダー的存在では全くなく、むしろ日本を墮落と腐敗と悪徳とに導いた負の存在であり、「薩長主義」でもって日本を破滅と滅亡に導くかもしれない存在なので、内村は「血涙の浮び来る」のを感じざるを得ないとまで書いている。かくして、ジャーナリスト時代の内村は「吾人は此時機に際して藩閥政治を根絶し、之に替ふるに国民の意志に成る憲法政治を建設せんと欲する者なり。」<sup>34</sup>と要求し、「薩長藩閥政府」に「闘ひ」を挑んでいたのである。

以上が内村の薩長と明治維新に対する評価である。ここから導き出される課題は、薩長以外の地域が薩長による支配を終焉させてその害毒を一掃し、さらに「国民の意志に成る憲法政治」を実現すべく主体的に日本というネーションにコミットしなければならないということである。内村はこの課題を担う主体として東北地方を想定していた。例えば、「胆汁数滴」には以下のようなテキストもある。

「西南の士は怜智に長けて不実なり、東北の士は愚鈍なれども実直なり、日本国の政權西南人士の掌中に落ちて国に「愛国論」あり「尊王主義」あり、彼等は能く事物を利用するの術を知る、然れども彼等の支配の下ありて民権の挙がりし実例なし、日本国の民権主張者は東北に多くして西南に尠し、僧日蓮、佐倉宗五郎等屈指の民権家は多くは是れ函嶺以東の人なり、愚直或は暴とし終る事あらん、然れども正義と忠勤との仮面を被りて投機商の親玉となるが如きは東北人士の逆も学ぶこと能はざる所なるべし、民権の振興、実直の恢復は東北人士の手を借らざるべからず。」<sup>35</sup>

このように、内村は薩長政府が流した腐敗や害毒に対する「民権の振興」「実直の恢復」

<sup>32</sup> 全集四卷、一三一～一三二頁。通し番号は二十五、小見出しは「此極」

<sup>33</sup> 全集四卷、一三四頁。通し番号は三十、小見出しは「福沢論吉翁」

<sup>34</sup> 「吾人の志望」全集五卷、九〇頁。これは一八九七年一月一〇日に万朝報にて発表された短文のテキストである。

<sup>35</sup> 全集四卷、一二四頁。通し番号は七、小見出しは「東北対西南」

を東北の人々が主体的に日本というネーションにコミットすることのうちに期待している。ここで念頭に置かなくてはならないのは東北が日本というネーションのなかで置かれた地位である。歴史学者の河西英通によると、戊辰戦争によって軍事的勝利者である西南の官軍が開化を意味するようになり、それに対して東北はアイヌ民族の蝦夷地と同じような、天皇を知らない未開地として設定されるようになった。「西南諸藩が列藩同盟に敵対したという政治的選択・判断の正当性が、軍事的勝利によってではなく、近世以来の東北＝異境・異域に対するいわば文明論的勝利によって支えられた」<sup>36</sup>というわけである。東北は近代日本のはじめから日本というネーションのなかでは天皇を知らない未開地として劣位に置かれていたのである。これはその後の近代化においても変わらなかった。河西はさらに「一九一〇年代の東北は地域格差を内包しつつも、産業資本確立・帝国主義転化期の日本にあって、一方では米を中心とする第一次産品と資本主義的労働市場および北海道拓殖への労働力供給地として、他方では外米や肥料・軽工業品の移入地として、『国内植民地』的役割を果しはじめたのです。」<sup>37</sup>と指摘している。はじめから劣位に置かれていた東北はその地位を回復することなく、むしろ日本の「国内植民地」とされていった。内村は、「薩長藩閥政府」という形で日本の中心を支配する西南と劣位に置かれて「国内植民地」にされていった東北との間にあって東北の側につき、東北の視点から「薩長藩閥政府」を批判し、同時に東北が日本というネーションにコミットすれば薩長政府の流した害毒から日本を救うことができると考えていた<sup>38</sup>。それでは、東北はどのように日本というネーションにコミットすればいいのだろうか。

ここで本論が注目するのはスコットランドである。「カルビンの肖像に題す」というテキストにてスコットランドによる支配関係の内側からの転倒に言及してから一年後の一九一四年、内村は「東北救済策」<sup>39</sup>というテキストにおいて東北とスコットランドとの双方に言及している。これは一九一三年に東北と北海道とを冷害による大規模な凶作が襲ったことを受けて書かれた短いテキストであるが、内村は東北救済策として、具体的な飢饉対策ではなく、むしろキリスト教による宗教的救済の必要性を主張している。

「東北を救ふとは東北人を救ふことである、東北人を救ふとは東北人一人一人を救ふことである、而して人を救ふとは彼を神に導くことである 人を其造主にして父なる神に結附けて其人は完全に救はるゝのである、其時彼は独立の人となるのである、生活問題の彼を悩ますなく、他人の圧迫を被るなきに至るのである（中略）東北に若し幾人かの

<sup>36</sup> 河西英通『東北—つくられた異境—』中公新書、二〇〇一年、一一頁。

<sup>37</sup> 河西前掲書、一九一頁

<sup>38</sup> 詳しくは拙論「内村鑑三における「東北」の概念—地方の観点からの「日本」概念の分析—」『アジア・キリスト教・多元性』第一七号、二〇一九年、九七～一三二頁を参照。

<sup>39</sup> これは一九一四年一月一〇日、『聖書之研究』一六二号に掲載された。

パウロとルーテルとウエスレーとが起り、而して東北人が是等神の人の言を聴くならば、それで東北は其根柢から救はるゝのである」<sup>40</sup>

内村は東北人一人一人を父なる神に結びつけることでこの世的な「生活問題」や「他人の圧迫」から「独立の人」とすることこそ、東北の救済であると論じている。そして、この世的なものからの「独立」を支えるのが父なる神への信仰なのである。注意すべきことは、ここで内村が論じているのは、さしあたりの救援策や具体的な飢饉対策ではなく、もっと「根柢から」のレヴェルで東北の救済だということである。内村が具体的な飢饉対策や救援策を考えていなかったという、必ずしもそうではない。というのは、同年六月の青山学院大講堂での講演にて内村は「東北の饑饉は四五年に一度宛必ず襲ふが、八丈島が饑饉を馬鈴薯に依て免れた事は、東北地方が日常の食物を改良せねばならぬ事に暗示を与へて居る。」<sup>41</sup>と述べているからである。にもかかわらず、内村はこのテキストではそうした具体的な飢饉対策を論じていない。ここで内村が論じているのはそれとは文脈や次元の異なる根本的なレヴェルでの「東北救済策」なのである。そして、宗教的救済によって豊かになった国の一つとしてスコットランドが登場するのである。

「蘇格蘭は我東北よりも沃饒なる国ではない、然るに蘇格蘭人の多数が靈的に救はれて今や世界屈指の富国となつたのである、和蘭も爾うである、瑞典も爾うである、丁瑪も爾うである、国の富は其土地に於てあらずして其民の心に於てあるのである、国の救済を単に経済的方面より看るほど浅薄にして愚かなることはない。」<sup>42</sup>

ここでは、スコットランドは「東北」と気候や地質が似ている国の一つとして、オランダ、スウェーデン、デンマークとともに挙げられ、そうした国であっても「其民の心」を豊かにし、「靈的に救はれ」ることによって「世界屈指の富国」となつたとされている。キリスト教信仰によって靈において肉に勝つことこそ、人々をこの世的なものから独立の人とし、さらに国を豊かにすることにつながっていくのである。国や民の繁栄の背後には何らかの精神性が必要であり、内村は東北地方と東北人との繁栄に必要な精神性はスコットランドの場合と同じく、プロテスタントのキリスト教だと考えていた。かくして、内村は東北に対し、スコットランドに倣ってキリスト教を受容することで「其民の心」において「富国」となることを求めているのである。

問題は東北に対してスコットランドに倣うように求める内村の議論をどのように解釈し評価するかである。その際、考慮する必要があるのが同時代の他の言論との関係である。河西

<sup>40</sup> 全集二〇巻、二四二頁。

<sup>41</sup> “Be Ambitious” 全集二一卷、四九三頁。

<sup>42</sup> 全集二〇巻、二四二頁。

によると、国民国家内での劣位を論じる際に東北とスコットランドとを比較する東北＝スコットランド論が当時の日本でしばしば行われていた<sup>43</sup>。スコットランドも東北もともに国民国家の中で劣位に置かれているという認識が共通してみられると言う<sup>44</sup>。内村の議論ははたしてこうした東北＝スコットランド論の系譜のなかに位置付けられるものであろうか。確かに、河西も指摘するように<sup>45</sup>、一見すると、内村の「東北救済策」におけるスコットランドへの言及はそれほど明白な東北＝スコットランド論ではないようにも思える。なぜなら、「東北救済策」のテキスト中では、スコットランドは「東北」と似ている国の一つとして、オランダ、スウェーデン、デンマークとともに挙げられているに過ぎず、国民国家内での劣位を論じる明白な東北＝スコットランド論をこのテキストだけから読み取るのは少し無理があるからである。しかし、前節でみたように、当時の内村は既に「カルビンの肖像に題す」という別のテキストにおいて、スコットランドをカルヴィニズムの受容によって支配関係の内側からの転倒に成功した国として認識していた。国民国家の中での劣位という問題意識を内村は持っており、それを転倒させることに成功した国としてスコットランドを把握していたのである。したがって、「東北救済策」を超えたテキスト横断的な視点に立てば、内村の議論を東北＝スコットランド論の系譜に位置付けることは十分に可能であろう。さらに踏み込んで言えば、内村は東北の置かれた「国内植民地」という国民国家内での劣位を、スコットランドに倣い、カルヴィニズムの受容による支配関係の内側からの転倒という戦略によって逆転させるべきだと考えていたと推定することも十分に可能であろう。すなわち、スコットランドがカルヴィニズムの受容によってイングランドを「精神的に」圧倒し、制度上の外見とは逆にイングランドや大英帝国を内側から支配するようになったのと同じように、東北もまたスコットランドに倣いつつ、キリスト教の宗教的救済によって薩摩や長州を「精神的に」圧倒し、藩閥政府や大日本帝国を内側から支配するようになるべきだと考えていた可能性を汲み取ることができるのである。この推定を補強する別の状況証拠も存在している。やはりテキスト横断的な視点からの考察となるが、一九〇六年に書かれた「東北伝道」というテキスト<sup>46</sup>と「東北救済策」との比較である。一九〇六年はスコットランドがイギリスという礫岩のような連邦国家のなかでもっている独特な地位について内村が言及する以前であるが、その時点で内村は「東北救済策」とほぼ同一の内容を「東北伝道」において論じている。

<sup>43</sup> 河西によれば、一八九七年の時点で既に東北＝スコットランド論が見られるという。最も有名な東北＝スコットランド論は陸羯南の論であり、一九〇一年の「北日本と北英国」というテキストにて展開されている。河西英通『東北を読む』無明舎出版、二〇一一年、四二～五三頁を参照。

<sup>44</sup> 河西英通『続・東北—異境と原境のあいだ』中公新書、二〇〇七年、二三頁を参照。

<sup>45</sup> 河西前掲書、二三頁。

<sup>46</sup> これは一九〇六年に出版された半谷清寿(はんがいせいじゅ)の『将来之東北』に内村が寄稿したテキストであり、内村の東北論に関する比較的まとまったテキストとなっている。内村は半谷の本の出版よりも先に『聖書之研究』誌上に本テキストを掲載した。そのため、本テキストには「近刊半谷清寿翁著『東北の将来』へ寄贈せんとて稿せる一篇」と添書きが付けられている。全集一四巻、一九六～二〇一頁、同じく全集一四巻、解題、五一五頁を参照。

しかし、興味深いことに、「東北伝道」は、東北が倣うべきモデル国としてフィンランド、ノルウェー、スウェーデン、カナダ、アイスランドは挙げるが、スコットランドには全く言及しない<sup>47</sup>。一九〇六年当時、スコットランドは既に内村の理想の国であったにもかかわらずである。しかし、スコットランドの支配関係の内側からの転倒という戦略に対する評価を明白に表現した「カルビンの肖像に題す」の一年後、内村は東北とスコットランドとを比較し、一種の東北＝スコットランド論を展開しているのである。モデルとなる国が、東北と風土が類似しかつ独立している国々から、独立を喪失して国民国家における内なる多様性を示すようになった国へと変化しているのである。このモデル国の変化の理由について内村は何も書いていないので推測するしかないが、スコットランドのカルヴィニズムの受容による支配関係の内側からの転倒という戦略が東北と日本との関係に対しても有効であると考えようになったからだというのは十分に推定可能であろう。むしろ、この議論はテキスト間の比較による推定であるが、内村の議論はこのようなテキスト横断的な解釈を可能とするポテンシャルを秘めているのである<sup>48</sup>。

なお、本節の最後に、もし東北がこの支配関係の内側からの転倒という戦略をとった場合、日本というネーションの外見上の統一は維持されたままになることに触れておこう。というのは、支配関係の内側からの転倒という戦略からは、例えば東北が日本というネーションへのコミットメントを放棄して「薩長藩閥政府」から分離独立するといった戦略は出てこないからである。むしろ、内村の東北＝スコットランド論は東北が国民国家内での劣位をひっくり返すために日本というネーションに積極的にコミットすることを前提としている。内村の墓碑銘に書かれた“I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.”になぞらえて表現するなら、“Tohoku for Japan”というのが内村の戦略であった。つまり内村の議論は最初から二つのJのうちのJapanが壊れるような事態を起こさないように構築されているのである<sup>49</sup>。むしろ、東北という「国内植民地」の場合なら、日本というネーションの外見上の統一の維持に対し、何も問題はないだろう。問題となるのは「国内植民地」とは文脈が異なる海外の植民地の場合である。この問題については次節で検討することとする。

### 3. 大日本帝国のスコットランドとしての朝鮮

内村がスコットランド概念を適用したのは、東北以外だと、朝鮮が挙げられる。内村の朝鮮観は先行研究においてしばしば批判的に考察されている。例えば、咸錫憲<sup>ハンソクホン</sup>は、韓国併合や

<sup>47</sup> 全集一四巻、一九六～二〇一頁を参照。

<sup>48</sup> 以上のテキスト横断的な解釈に関しては、芦名定道による波多野精一の脱構築的読解とその方法論的な考察を参考にした。芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性——二つの地平が交わるころにて——』三恵社、二〇一六年、四二～八三頁を参照。

<sup>49</sup> 詳しくは拙論「内村鑑三における「東北」の概念——地方の観点からの「日本」概念の分析——」『アジア・キリスト教・多元性』第一七号、二〇一九年、九七～一三二頁を参照。



朝鮮の独立の問題について内村に尋ねた際、内村は「イギリスのスコットランドのようになればよいのではないか」と答えたこと述べ、この回答に不満を抱いたという<sup>50</sup>。森山浩二はこの発言について内村は「朝鮮民族の独立への願いを理解し、朝鮮民族の《恨》に共感するところまでは至っていない」<sup>51</sup>と評価し、「結果として同化政策推進に間接的に協力したことになったと言えないだろうか。」<sup>52</sup>と批判している。注目すべきことはスコットランドという地名の登場である。前節で論じたように、内村は「東北」の救済を論じる際にスコットランドに言及していたが、韓国併合後の朝鮮に対しても同様にスコットランドを引き合いに出している。そこだけに着目するなら、内村が東北という「国内植民地」に関する議論を朝鮮という海外の植民地にも敷衍し、韓国併合後の朝鮮に当てはめて考えていたと推定することができる。本節では、この問題について、内村の認識や戦略の妥当性の検討も含めて、論じることとする。

まずは内村の朝鮮観と先行研究での批判を概観しておこう。内村は韓国併合には批判的であったが<sup>53</sup>、併合後の朝鮮の問題に関しては日本との合同を維持するという方向で考えていた。その際、日本と朝鮮との合同において重要な役割を果たすのがキリスト教信仰であり、キリストにおける信者の一致である。例えば、「相互の了解」という一九一七年に発表されたテキスト<sup>54</sup>が挙げられる。これは朝鮮基督教青年修養会にて内村が行った講演の大意をまとめたテキストである。当時の内村は、東京朝鮮基督教青年会の世話役であった<sup>キムジョンシク</sup>金貞植を通して朝鮮人クリスチャンと交流を持っていた。この「相互の了解」において、内村はガラテア書三章二八節「<sup>か</sup>斯<sup>か</sup>る<sup>もの</sup>者<sup>のうち</sup>の中には<sup>びと</sup>ユダヤ人<sup>びと</sup>また<sup>びと</sup>ギリシヤ人<sup>ど</sup>ある<sup>ひ</sup>ひは<sup>ど</sup>奴隷<sup>ある</sup>ある<sup>ひ</sup>ひは<sup>じ</sup>自主<sup>ある</sup>ある<sup>ひ</sup>ひは<sup>を</sup>男<sup>ある</sup>ある<sup>ひ</sup>ひは<sup>を</sup>女<sup>の</sup>分<sup>なし</sup>なし<sup>を</sup>蓋<sup>なん</sup>なん<sup>ぢ</sup>ぢら<sup>みな</sup>皆<sup>あり</sup>キリスト・イエス<sup>あり</sup>に<sup>ひ</sup>在<sup>ひ</sup>て<sup>な</sup>一<sup>なり</sup>なれば也」(文語訳)に表現されているギリシヤ人とユダヤ人の関係を、日本人と朝鮮人との関係にも適用し、次のように言う。

<sup>50</sup> 咸錫憲「私の知っている内村鑑三先生」『内村鑑三全集』月報三九、四頁。

<sup>51</sup> 森山浩二「内村鑑三と朝鮮」内村鑑三研究第二十九号、キリスト教図書出版社、一九九二年、一六頁。

<sup>52</sup> 森山前掲論文、一六頁。

<sup>53</sup> 内村は韓国併合に際して「国を獲たりと喜ぶ民あり、国を失ひたりとて悲む民あり、然れども喜ぶ者は一時にして悲む者も亦一時なり、久しからずして二者同じく主の台前に立たん、而して其身に在りて為せし所に循りて鞠かれん、人、若し全世界を獲るとも其靈魂を喪はゞ何の益あらんや、若し我領土膨張して全世界を含有するに至るも我が靈魂を失はゞ我は奈何にせん、嗚呼我は奈何にせん。」(「領土と靈魂」全集一七卷、三三二頁)と批判的に書いている。鈴木範久はこの内村のテキストを、『護教』『福音新報』『基督教世界』の論説と比較し、「三紙それぞれ微妙なニュアンスの相違は認められるものの、韓国併合をプラスに評価していることに変わりはない。内村が消極的ながらマイナスに見ている見方、感じ方とは方向のちがいが見受けられる。」(鈴木範久『内村鑑三日録8 木を植えよ』教文館、一九九五年、一七三頁)と評価している。

<sup>54</sup> これは一九一七年六月一〇日の『聖書之研究』二〇三号にて発表されたテキストであり、「四月二日箱根堂ヶ島開催朝鮮基督教青年修養会に於ける講演の大意」という副題がつけられている。全集二三卷、二七〇～二七五頁。

「日人は鮮人を解せず鮮人又日人を知らず、誤解に加ふるに<sup>うらみ</sup>冤仇、憎悪に加ふるに復讐、而して如何にして之を除かん乎とは政治家外交家を悩す大問題である、而して其完全なる解決は唯一つあるのである、人々をしてイエスキリストを知らしむるにある、天が下に之を除いて他に世界平和の途はないのである」<sup>55</sup>

内村はここでキリストにおける信者の平等と一致という宗教的な次元の議論を持ち出し、それを現実政治の次元にある宗主国日本と植民地朝鮮との関係に当てはめることによって、一種の融和論を聴衆や読者に説いている。すなわち、日本人と朝鮮人との間にある「誤解」「冤仇」「憎悪」「復讐」の原因は日本の植民地支配という現実政治における罪にあるにもかかわらず、内村はそれについては何も言及せず、むしろキリスト教信仰でもって日本人と朝鮮人との間にある「誤解」「冤仇」「憎悪」「復讐」を取り除いて互いに一致すべきだと説いているのである。この内村の融和論は先行研究において、植民地支配という日本の罪に対する反省が不十分であるとして批判されてきた。例えば、役重善洋は上記の議論に対し、「日本の植民政策に対する批判意識はまったく見られない。これでは、総督府の融和政策の一環として朝鮮伝道を行っていた組合教会の立場と大きな違いはない。」<sup>56</sup>とし、「内村は朝鮮人の抗日意識を問題視し、積極的に自民族中心主義的ともいえる融和論を唱えた。」<sup>57</sup>と批判的に評価している。役重によれば、韓国併合の時期には内村は朝鮮人クリスチャンとの交流を通して日本の帝国主義に対する批判を強め、「植民地支配下の朝鮮人を歴史の主体として把握するに至った」<sup>58</sup>が、その後、権力との直接対決を避けつつ再臨信仰を深めるなかで、終末への待望が「民族的責任から逃れる口実」<sup>59</sup>とされるようになり、結果として「内村は、再臨信仰の出発点にあった『日本の罪』への批判意識を鈍らせ、同時に朝鮮人という目の前の『他者』と正面から向き合うことを回避してしまった」<sup>60</sup>という。役重は、この内村の保守的な態度は内村の「預言者的ナショナリズム」の限界を示すものであるとして批判的に評価する。内村の「預言者的ナショナリズム」は「あくまで神と日本人との関係をめぐる反省であって、朝鮮人と日本人との関係をめぐる反省という点においては極めて不十分なものであった。」<sup>61</sup>というわけである。

以上が内村の朝鮮観と先行研究での批判である。改めて概観すると、内村のスコットランド概念への言及は見当たらないことがわかる。では、スコットランド概念を切り口にした場

<sup>55</sup> 全集二三巻、二七四頁。

<sup>56</sup> 役重善洋『近代日本の植民地主義とジェンタイル・シオニズム——内村鑑三・矢内原忠雄・中田重治におけるナショナリズムと世界認識』インパクト出版、二〇一八年、一六四頁。

<sup>57</sup> 役重前掲書、一六四頁。

<sup>58</sup> 役重前掲書、一六一頁。

<sup>59</sup> 役重前掲書、一六四頁。

<sup>60</sup> 役重前掲書、一六五頁。

<sup>61</sup> 役重前掲書、一六六～一六七頁。

合、朝鮮と日本という問題について、どのようなことが内村のテキストから論じられるのだろうか。

公的に発表されたテキストのうち、内村が朝鮮とスコットランドとを比較して論じているのは、一九一五年の「聴講録（二） 教会と聖書 朝鮮人に聖書研究を勧むるの辞」というテキスト<sup>62</sup>である。これは先述した「相互の了解」と同じく、<sup>キムジョンシク</sup>金貞植の東京朝鮮基督教青年会での講演をまとめたテキストであるが、発表されたのは「相互の了解」よりも前であり、また「カルビンの肖像に題す」にてスコットランドによる支配関係の内側からの転倒に言及してから二年後であった。このテキストにおいても内村は「日鮮人の真の合同融和」<sup>63</sup>を問題として論じ、「日本人も朝鮮人も共に此キリストとの深き関係に入りて真の合同は成るのである」<sup>64</sup>とあるように、「相互の了解」と同じ考えを示している。ただ、「相互の了解」と異なるのは、内村が「真の合同融和」を可能とするキリスト教について、西欧のキリスト教史の観点と東アジアの儒教の伝統の観点とから考察している点である。まず、内村は西欧のキリスト教史を教会と聖書という観点から概観し、カトリックのように教会が優位なキリスト教とプロテスタントのように聖書が優位なキリスト教との二種類のキリスト教があることを指摘し、キリスト者はどちらか一方を選び取らなければならないと主張する。内村自身の選択はもちろん聖書が優位なキリスト教である。なぜなら「教会を絶対に無用とは言はないが、聖書をよく学べば教会は自ら盛んになるのであつて聖書を学ぶ事が衰ふれば教会は骸骨たるに過ぎない」<sup>65</sup>からである。ここで、日本と朝鮮と中国とに共通な伝統として儒教の教育方法が議論に交差する。儒教の場合、東洋人は孔子や孟子の書物を読むことによってその精神を理解し、その良い弟子となることができたが、聖書の場合に関しても同じことを行ふべきだと内村は主張するのである。「已に経書によりて儒者となり得た吾等が生命の書たる聖書によりて基督者となり得ない訳がない」<sup>66</sup>というわけである。かくして、内村は日本、朝鮮、中国を「聖書国」<sup>67</sup>にすることを目指すべきだと主張する。ここでスコットランドが「聖書国」の一例として登場する。

「世界の中の聖書国は蘇格蘭である、同地の田舎に於て教師が説教をなし、若し其引用の聖句に違いがあれば老媪は聴衆の中より立ちて是を正すのである、而して彼国は古来最も多くの偉人を出したのである」<sup>68</sup>

<sup>62</sup> これには「五月三十日夜東京朝鮮基督教青年会に於ける講演大意」という副題がつけられている。発表されたのは一九一五年七月一〇日に出版された『聖書之研究』一八〇号においてであり、署名は「内村鑑三口述 中田信蔵筆記」となっている。全集二一巻、三六五～三六九頁。

<sup>63</sup> 全集二一巻、三六六頁。

<sup>64</sup> 全集二一巻、三六六頁。

<sup>65</sup> 全集二一巻、三六七頁。

<sup>66</sup> 全集二一巻、三六八頁。

<sup>67</sup> 全集二一巻、三六八頁。

<sup>68</sup> 全集二一巻、三六八頁。

プロテスタントの聖書中心主義的な信仰によって多くの優れた人材を輩出した偉大な国というスコットランド概念がここでも確認できる。そして、内村は朝鮮に対し、スコットランドに倣って偉大な「聖書国」となるように求めるのである。

「若しも朝鮮人が曾て孔孟の書に接せしが如くに聖書に接するに至らば朝鮮は怖る可き国となるであらふ、日本亦斯の如きを得ば実に偉大なる国となるであらふ。若し然らずして聖書は唯教会へ行きて時々見るに止まり徒に洗礼式に列し晚餐会に与るを以て能事となし、単に社会事業家たり慈善家たるに止らば或いは基督者たるの名は保ち得んも其実はないのである。」<sup>69</sup>

儒教の伝統的な教育方法でもって聖書に臨めば、朝鮮はスコットランドのような偉大な国になることができると内村は考えていたのである。

以上が内村の朝鮮とスコットランドとの比較論の要約であるが、問題はこれをどのように解釈し評価するかである。特に、スコットランド概念のもつ支配関係の内側からの転倒という考えが朝鮮に対しても適用されているかどうかの問題となる。結論を先取りすると、内村は、明示はしていないものの、どうやら適用して考えていたらしいことが、テキストの細部から読み取ることができる。例えば、本テキストにおいて、内村は東京朝鮮基督教青年会の朝鮮人クリスチャンの聴衆に向かって次のように呼びかけている。

「余は切に諸君に対して聖書の研究を勧むのである、（中略）諸君願くは之を浅薄に考ふる事なく、深き研究に志して自身の信仰を養ふと同時に此生命の泉を以て朝鮮を救ひ、日本を救ひ世界を救ふの壮志を抱かれよ」<sup>70</sup>

注目すべきことはここで登場する国の救いの順番である。まず、朝鮮人クリスチャンの聖書の研究と信仰によって朝鮮が救われ、次にその救いが日本に及び、さらに全世界に及ぶとされている。この朝鮮を起点として徐々に拡大していく過程が意味しているところは、大日本帝国の内部で朝鮮がキリスト教信仰によって日本よりも上位に来るように内村は求めていたということである。スコットランドのような支配関係の内側からの転倒が大日本帝国でも起こることを内村は想定していた。さらに「世界を救ふ」とあるところから敷衍すると、イングランドを内側から支配したスコットランドがイングランドの生み出した大英帝国や英語圏の独立国の内側にも入り込んで大英帝国および英語圏の独立国を道具的に利用する形で

---

<sup>69</sup> 全集二巻、三六八頁。

<sup>70</sup> 全集二巻、三六八頁。

「全世界」を圧倒するに至ったのと同じように、朝鮮が大日本帝国を内側から支配し、さらに大日本帝国を道具的に利用する形で「世界を救ふ」に至ることを考えていたと解釈することも可能であろう。実際、内村は日本人クリスチャンよりも朝鮮人クリスチャンの方を高く評価している。

「日本の信者は誠によく社会を知り、政治を知り慈善事業を知るが而も聖書を知らない、平信徒のみでなく按手札を受けし教師にして猶驚く計り聖書に冷淡なるを見るのである、これ実に日本の基督教の弱点である、余は朝鮮の基督教が聖書的であると言ふ事を聞いて之に多大の望を属<sup>しよく</sup>するのである、諸君は願くは飽くまで聖書的であらん事を望む。」

71

内村にとって、「聖書的」な朝鮮人クリスチャンは「社会」のことしか知らない日本人クリスチャンよりも信仰的に上位に来るべき人々であり、したがってキリスト教信仰の受容によってスコットランドがイングランドを「精神的に」圧して支配したように、日本を「精神的に」圧して支配することが潜在的に可能な人々であった。内村は大日本帝国において日本と朝鮮の支配関係がキリスト教信仰によって内側から転倒されることに「多大の望」を託していたのである。

この大日本帝国内での日本と朝鮮との支配関係の内側からの転倒を希望する議論は、スコットランドの登場こそないものの、内村の晩年まで確認することができる。例えば、晩年の『羅馬書の研究』<sup>72</sup>にて内村は、ローマ書における異邦人の救いとイスラエルの救いとに関するパウロの議論を解釈しつつ、次のように言う。

「今この事を今日に喩へて見るなれば丁度我日本民族は当時のユダヤ民族の位置にある（中略）日本人は福音を斥ける、そのために恵は支那、朝鮮に及びつゝある、即ち日本人の不信は支那人、朝鮮人に信仰の与へらるゝ機縁となつた、然る後ち福音は彼等より日本に伝へられて、遂に全東洋が救はれるのであらうと思はれる、即ち神は東洋全体に福音の光を普ねからしめんために先づ日本人を不信の中に閉ぢこめたのである、故に日本民族は棄てられたのではない、後ち必ず大なる救に浴するのである、即ち最後に日本が救はれて東洋全体が救はれるのである。」<sup>73</sup>

<sup>71</sup> 全集二一巻、三六九頁。

<sup>72</sup> これは内村の信仰とキリスト教思想の集大成とでもいうべきテキストである。一九二一年一月一六日から一九二二年一〇月二二日まで六〇回に渡って行われた「羅馬書講演」がもととなり、畔上賢造が編纂する形で執筆された。全集二六巻、一六～四四八頁に収録。

<sup>73</sup> 全集二六巻、三四七～三四八頁。

内村は日本をパウロの時代のイスラエルになぞらえ、イスラエルの不信によって異邦人に福音が広まったように、日本の不信によって他の東アジア諸国に福音が広まったと指摘する。そして、異邦人から福音がイスラエルにもたらされることによってイスラエルが救われるように、朝鮮や中国から日本に福音がもたらされることによって日本が救われるのではないかと神の経綸を予想している。パウロの救済史の考えと当時の東アジアに対する内村の社会分析とが交差している。ここに、信仰上のことがらではあるが、大日本帝国内部における日本と朝鮮の支配関係の転倒を見て取ることができる。さらに議論は大日本帝国の範囲を越えて東アジア全体に及んでおり、対象も朝鮮から中国にまで拡大している。

「日本人は東洋の兄弟たる支那人、朝鮮人を蔑視しつゝ来つた、今も依然として蔑視してゐる、中には彼等を虐げるを以て快としてゐる者がある、神は高ぶる者を卑くし卑き者を高くし給ふ、日本人が彼等に先ちて欧米の物質文明を吸収し、其のために一等国の列に入りて東洋の兄弟を軽しむる時、神は其物質文明を日本に与へ置きて其福音をその手より奪ひ、之を支那人、朝鮮人に与へ、然る後ち彼等を以て福音に於ける日本人の師となし、遂に生命の光を全東洋に漲らしむるの道を取り給ひつゝあるかも知れない」<sup>74</sup>

内村は、明治維新以来の富国強兵政策によって脱亜入欧にある程度成功しつつあった当時の日本人が朝鮮人と中国人に差別的なふるまいをすることを批判し、朝鮮人と中国人はむしろ「福音に於ける日本人の師」となりうる優れた人々であると主張する。そして、朝鮮人と中国人が関係を転倒させて日本人の上位に立って福音を日本にもたらすことによって東アジア全体に福音を行き渡らせるというのが神の経綸ではないかと予想している。キリスト教信仰による支配関係の内側からの転倒が大日本帝国を越えた東アジアにおける神の経綸の予想にまで使われているのである。このように、内村は大日本帝国における日本と朝鮮との支配関係の内側からの転倒、さらには大日本帝国を越えた東アジア地域における日本と中国との関係の転倒を認め、朝鮮人と中国人とが「福音における日本人の師」として日本人の上位に立つことに「多大の望」を託していたのである。

以上の内村の議論をどのように評価するかが本節においても最後に問題となる。確かに、先行研究が指摘するように、内村の議論はキリスト教信仰でもって日本と朝鮮の合同を勧めるものであり、一見すると、同化政策と大差ないように思える。しかし、本節で明らかにしたように、内村の議論にはスコットランド概念を介して支配関係の内側からの転倒というモチーフが反響している。内村は大日本帝国における日本と朝鮮と支配関係の内側からの転倒を認めて、そこに希望すら見出ししていた。したがって、外見上は同化政策と大差なくても、その意味するところの内実は相当に組み換えられていると言えよう。内村の議論は同化政策

<sup>74</sup> 全集二六巻、三四八頁。

を内側から破壊し、無効化することを射程に収めていたのである。管見の限り、このことを指摘した先行研究は見当たらなかった。

しかし、問題がないわけではない。論者が指摘したい問題点は、大日本帝国における支配関係の内側からの転倒を求める内村の議論は朝鮮人が主体的に大日本帝国にコミットすることを前提として要請しており、朝鮮が大日本帝国から分離独立することを最初から排除してしまっていることである。海外植民地においては、国内植民地とは異なり、そもそも宗主国のネーションに植民地側の人々がコミットすること自体の妥当性が問われなくてはならず、場合によっては宗主国の不義や罪を糾弾し、分離独立して独自のネーションの形成を目指す必要も出てくる。しかし、内村はそのような議論は展開せず、最初から大日本帝国にコミットすることを求めてしまっている。それはなぜかと考えると、先述した朝鮮人や中国人が「福音に於ける日本人の師」となって日本に救いをもたらすという議論に示されているように、支配関係の内側からの転倒によって朝鮮人や中国人が日本人の上位に立つことが最終的には日本人の利益になるからである。植民地側の利益や思いに関しては考慮されていない。これでは、内村がいくら朝鮮人クリスチャンのことを高く評価していたとしても、本節の冒頭で紹介したように、<sup>ヘンソクホン</sup>咸錫憲が内村の回答に不満を抱いたり、森山が「朝鮮民族の独立への願いを理解し、朝鮮民族の《恨》に共感するところまでは至っていない」と評価したりしたとしても、仕方がないと言わざるを得ないだろう。前節では内村の東北＝スコットランド論を内村の墓碑銘になぞらえて“*Tohoku for Japan*”と表現したが、それに合わせるなら、本節での内村の思想の基本的な枠組みは、いくら大日本帝国内における支配関係の内側からの転倒を認めていたとしても、最終的には“*Korea for Japan*”であって、“*Korea for herself*”ではなかった。韓国併合後の内村において“*Korea*”は“*Tohoku*”と同じような国民国家の内部における多様性の一つとして、“*Japan*”の下位区分として前提されており、“*Tohoku*”と同じように下位区分同士の間で支配関係を転倒させることが目指されているのである。これでは当時の朝鮮人の心情や境遇に寄り添っているとは言えないであろう。役重の指摘するように、内村は「朝鮮人クリスチャンを信仰の側面においてのみ理解しようとしていた」<sup>75</sup>のであり、「朝鮮の歴史や文化に対する無理解・無関心」<sup>76</sup>が垣間見えるのである。内村は朝鮮人を信仰という普遍的な基準から高く評価することはあっても、朝鮮人のナショナリズムや独立心を鼓舞するような独自の文化や歴史に言及することはなかった。これは内村の思想の限界と評価せざるを得ないであろう<sup>77</sup>。

---

<sup>75</sup> 役重前掲書、一六七頁。

<sup>76</sup> 役重前掲書、一六七頁。

<sup>77</sup> そもそも、スコットランドに対しても、内村はその道徳性を評価するだけで、スコットランド独自の文化や歴史に対してはまったく言及していない。朝鮮の場合と同様に、内村はあくまで道徳性や信仰といった他民族にも共有可能な価値を基準としてスコットランドを判断しており、スコットランド人のナショナリズムや民族意識を高揚させるような独自の文化や歴史にはまったく触れないのである。そして、スコットランドが大英帝国から分離独立する可能性についても、やはり朝鮮の場

## まとめ

本論では、内村の日本概念のもつ分裂と統一の契機について、スコットランド概念を手掛かりにして分析を試みた。第一節では、内村にとってスコットランドは、富国強兵と海外への膨張政策に励む当時の日本とは真逆の、道徳的にも文化的にも宗教的にも優れた理想の国であり、またカルヴィニズムの受容による支配関係の内側からの転倒に成功した国であったことを明らかにした。このスコットランド概念を内村は東北と朝鮮に適用した。第二節では、内村が「薩長藩閥政府」の害毒を匡正するという役割を東北が果たすことを期待しており、その際にスコットランドの、カルヴィニズムの受容による支配関係の内側からの転倒を東北に当てはめて考えていたと推定することができることを示した。第三節では、スコットランドの同じ戦略が韓国併合後の朝鮮にも適用されており、同化政策を内側から破壊するようなことが読み取れることと、にもかかわらず内村のこうした発想には“Korea for herself”ではないという限界もあることを明らかにした。

以上の内村の思索をどのように評するかについてである。もちろん、日本というネーションの枠組みが崩壊しないように構築されているという限界があることから内村の思索を解放とまで評することはできない。しかし、スコットランドのカルヴィニズムの受容による支配関係の内側からの転倒というモチーフが鳴り響いていることも確認できる。したがって、本論では、内村の思索を解放の萌芽であると位置づけたい。この解放の萌芽が内村以後の無教会キリスト教の歴史においてどのような成長を遂げたのか、それとも枯れて消えてしまったのか、それは現代においてどのような意義をもつのか、それが今後の無教会キリスト教の研究課題である。

(わたなべ・かずたか NCC宗教研究所)

---

合と同様に、まったく考えていない。おそらく、内村のスコットランド概念そのものが“Scotland for the British Empire”を基本的な枠組みとしており、“Scotland for herself”ではなかったのではないか。今後の課題としたい。